

ものがたり
あかりの物語③

石油ランプ (せきゆランプ)

せきゆ ランプは いま から 約 150 年前、 明治時代 になって 海外 から 輸入 されて 広まり
ました。 江戸時代 までの 行灯 は 室内 に 置いて 下 から 照らす タイプ の 照明 ですが、
せきゆ ランプ は 天井 につるして 使う ため、 頭上 から 照らす こと が できる よう に な
りました。 当時 の 人 から すると、 部屋 の 雰囲気 も 変わって 見えた よう です。

まめちしき ぶんごう えが
【あかりの豆知識】 文豪が描いたランプのあかり

『蜘蛛の糸』『羅生門』で知られる芥川龍之介の大正12年の小説『雛』には、
行灯、無尽灯、石油ランプが登場します。その一節を紹介합니다。

しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな気がしました。それは申す迄もございません。あ
の薄暗い無尽灯の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわ
たしは食事のあひ間も、時々ランプを眺めました。石油を透かした硝子の壺、動かない焰を守
った火屋、一さう云ふものの美しさに満ちた珍しいランプを眺めました。

「明るいな。昼のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、満足さうに申しました。

「眩し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顔には、殆ど不安に近い色が浮かんでゐたものでございます。

「そりやあ無尽灯に慣れてゐたから・・・だが一度ランプをつけちやあ、もう無尽灯はつけられ
ない。」(中略)

「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が来るんです。」

舞台は明治時代。石油ランプの登場以前に使われた無尽灯は、油が自動的に
補給される仕組みの画期的な照明具でした。それから約100年が経った今、
いつかLEDの光も「暗い」と言われる時が来るのでしょうか。



「頭上から照らす」といっても、日本の民家は木造のため、
天井近くでランプを灯すと火事になる恐れがありました。ラ
ンプを吊す位置が低かったので「ランプに頭をぶつけて大騒
ぎ」なんてことがあったようです。昼間は紐で天井近くに上
げておき、夜使う時に下げていました。

